



昭和49年10月～50年3月の日本海における

マサバ・マアジ・イワシ類・ブリの長期漁況予報

9月28日に金沢市で開催された日本海ブロック漁況海況連絡会議において、表記の期間の海況と浮魚類の長期漁況予報が検討され、後者について次のような予報文案が得られた。この一部は、西海区ブロック漁況海況連絡会議で作成される東シナ海域に関する予報と統合されたもの、責任水研である西海水研から「対馬暖流系アジ・サバ・イワシ漁海況予報」として発表される予定。なお、海況については前号を参照されたい（日水研）。

マサバ

日本海西部海域

漁況の推移：山陰沖では島根・鳥取両県の漁獲量が4月約14,000トン、5月約20,000トン、6月約19,000トンと驚異的な水揚げとなった。このことについては前期の予報でふれたように、対馬近海での1～2月の好漁の対象となった魚群および日本海北区新潟沖からの南下群のいずれかの、または両方の群の添加によるものと推定される。この大量の魚群は47年級が主体であった。

今期の予測：今後は予報前半はやや低調に推移し、後半になつてからは上向き傾向になると予想される。全体的には昨年同期並みの漁獲が期待できよう。加賀～若狭湾沖海域でも北部からの南下群により、後半期に好漁がみられよう。

漁獲の対象となるのは47・48年級であるが、48年級群の占める割合が増加し、また、49年級群も漸増してくるであろう。

日本海北部海域

漁況の推移：新潟沖漁場では2月に約17,000トン、3月には約14,000トンと47年級を主対象に好漁であつたが、4月に入つて急激に魚群の反応が少なくなり、漁獲量は約300トンと急減してしまつた。このことは前期の予報どおりの現象であつた。その後も操業船の北海道方面出漁と相まつて低調のまま終つた。

今期の予測：今後は10月以降南下群の接岸とともに漸次上向くと思われるが、本格的な好漁が期待されるのは後半期となる。

漁獲の対象となるのは47・48年級が主体で、49年級も加わってくるであろう。

なお、近年の傾向として日本海北部でのマサバの産卵が比較のおそくまで（7月）みられており、したがつて北部海域での49年級群の体長は西部でのそれにくらべると若干小型となる。

マアジ

漁況の推移：山陰沖では7月の漁獲量のみが昨年同期を上回つた程度で推移し、その他の各地でも低調であつた。一方、北部の石川県では4～7月の間におよそ1,200トン、富山県では6～8月に約500トンの漁獲があり、これら2県の近海海域では近年にない好漁であつたが、その他の海域では極めて低調であつた。

いずれの海域でも漁獲の主体は48年級で、47年級もまじり、6月以降には49年級がみられた。

今期の予測：今後は山陰沖では若干上向き傾向になると予想されるが、低調な資源水準を反映して漁獲量は昨年同期並みであろう。北部海域でも同様で、2月以降増加が期待されるがやはり昨年同期並みであろう。

漁獲対象の主体は48年級で、49年級も後半期にはモード10～12cmとなつて加わってくるであろう。

マイワシ

漁況の推移: 日本海における本年4～8月のマイワシの漁獲量は22,000トンで、昨年同期の20,000トンを若干上回り、昨年にひきつづき本年生まれの小羽イワシの来遊が目立つた。山口県沿岸では昨年より1カ月早い5月中旬より、また、島根～富山湾では6月中旬ごろから漁期に入った。漁獲のピークは7月にみられ、この時期の漁獲の大部分は小羽イワシによつて占められていた。

西部海域では、山陰沖のまき網漁場を中心に鳥取・島根・山口3県で漁獲量は約19,000トンであつた。漁獲対象は、4～5月には48・47年級の中・大羽イワシが主体であつたが、6月中旬ごろから49年級の小羽イワシの添加が増大し、7～8月には中・大羽イワシに代つて小羽イワシが主体となつた。

北部海域では石川・富山・新潟の3県を中心に定置網、流網で4～8月にほぼ昨年同期並みの1,800トンの漁獲量をあげた。漁獲対象は4～5月に47・48年級の大・中羽イワシが主体であつたが、6月中旬ごろから49年級の小羽イワシが富山湾内に出現し、7～8月には西部海域と同様小羽イワシ主体にかわつた。

今期の予測: 日本海におけるマイワシの産卵量は、数年来増加傾向にあり、北部海域の往年の主産卵場にあたる能登近海にも復活のきざしがみられる。また、前期における小羽イワシの添加状況からみても、日本海のマイワシ資源は着実に回復への道をたどりつつあるとしてよいようである。本年生まれの49年級の資源量は近年としてはもつとも水準の高かつた48年級をさらに上回るものと推定される。

したがつて、今期は西部海域および北部海域とも昨年同期を上回る好漁が期待される。西部海域では、前期にひきつづき山陰漁場を中心に49年級を主体に48年級群の混獲も多いであろう。北部海域では越冬海域にあたる富山湾を中心に定置網などで小羽イワシを主体としたかなりまとまつた入網が期待できよう。

ウルメイワシ

漁況の推移: 4～8月の漁獲量は3,700トンで、昨年同期の3,900トンをやや下回つた。漁獲の大部分は鳥取、島根両県のまき網によつてあげられ、漁獲の対象は大・中羽ウルメイワシであつた。

今期の予測: この期間は例年漁況が上向く時期に当るので、49年級の新規加入群もあつて、小・中羽ウルメイワシを主体にある程度の漁況が期待できよう。

カタクチイワシ

漁況の推移: 1～3月における北部海域の漁獲量は富山湾を中心に約800トンで、不振であつた前年同期の400トンを大幅に上回つた。4～8月の漁獲量は西部海域では山口県沿岸をふくめて約2,000トンで、昨年同期の約7,000トンを大幅に下回り、富山湾では900トンで前年同期の1,200トンをやや下回つた。

漁獲対象はいずれも前年春に生まれた大型群で、例年出現する前年夏以降に生まれた中型群は山陰漁場、富山湾ともいちぢるしく少なかつた。夏以降には今春生まれの小型群が漁獲対象に加わるが、これまでのところ富山湾内における夏期の漁況は昨年よりも好調に推移している。

今期の予測: 今期にはいずれにしても新規加入群がみられ、漁況は上向く時期に相当しているので、今春および夏以降に発生した中・小型群を主体に漁況は上向くであろう。しかし、45～46年当時の好漁は期待できない。

ブリ

漁況の推移: 太平洋南西海域および九州西海域における今年のモジャコ来遊量は全般に例年より少なかつた。ただ、対馬暖流水域の日本海の入口にあたる宍岐東側から山口県沿岸にかけては昨年同様好漁の模様であつた。

太平洋南西海域における今年のモジャコの魚体は大型群が多く、例年5月中旬から出現し、漁獲の主体となる小型群の来遊量は少なかつた。

日本海へ加入した後のツバイソ・アオコ・イナダ(0.2～0.5kg)の漁獲量は、7～8月の期間に関する限り、44年以降の最低を示し、春期のモジャコ漁況から行なつた予想を下回つている。魚体は42年以降もつとも小型であつた。

1年魚以上のブリ漁況は、山陰海域や能登西岸・佐渡周辺では小・中ブリを主体に46年以降最高の漁獲量を示し、好調に推移した。

今期の予測: 本年生まれのハマチ・フクラギ級(0.8kg前後)のこれまでの漁況は低調に経過しているが、青森西岸の漁況や北上期の海況などから北部海域への北上魚群量は、半年並みの水準に達したものと推定される。したがつて、南下期に当る今期の漁場は、北上期に比較して沿岸に形成される公算が強いので、半年並み(46・48年)の漁況は期待されよう。

1年魚以上の中・大型ブリは前期の山陰海域および能登・佐渡周辺海域での滞留群や北部海域への北上群が多いと推定されるので、今期はこれらの群の南下接岸の状況によつてはかなりまとまつた漁況が期待されよう。

日本海スルメイカ漁海況情報の迅速化試験を終えて

笠原昭吾

漁業情報サービス・センター（以後、センターと略記する）では、日本海における漁業の操業効率を高め、漁業経営の合理的発展を図ることを目的として、日本海漁業に必要な漁海況情報の収集・処理・広報に関する実効的方法の確立を目途に、昭和49～50年の2カ年間にわたって、その迅速化試験を行うことになった。その第1年目である本年の試験は、沖合スルメイカ漁業を対象に選り、この漁業の盛産期にあたる7～8月の2カ月間、関係水試・水高・水研などの協力のもとに実施された。

試験結果全般については、効果追跡調査をも終了した後、センターから詳細に報告されるはずである。ここでは、今回の試験のうち、直接に日水研が分担した漁海況情報の資料収集→情報文の作成→情報文のセンターへの送信、についてその概要を紹介し、作業中に気付いた若干の問題点にも触れて、今後の参考に供したい。

収集情報の内容

沖合スルメイカ漁業の操業実態にもとづいて、その操業活動に対して指針となる情報と考えられる主漁場の位置、漁獲量、イカ群の密度分布、魚体の大きさなどの現況に主眼をおき、さらにイカ群の分布移動や漁況についての見とおしを加えて取扱った。

情報資料の収集方法

1) 調査船及び実習船からの収集と通報

地方公庁船が日本海スルメイカ資源調査要領にもとづいて実施する漁獲試験結果のうち、①操業月日、②操業開始位置、③釣機の種類と台数、④操業時間、⑤漁獲尾数、⑥漁獲イカの外套長範囲とモード、⑦その他の各項目について、先週の水曜日から火曜までのものを毎週水曜日まで日水研へ通報してもらった。

6月26日から8月27日までの期間における情報提供は19機関(20隻)から延202点分であった。しかし、週別には、7月中旬に各船共同運航による沖合スルメイカ漁場調査が実施されたこともあつて、7月の第3、第4週(10日～23日)に集中していた。

2) 主要漁港からの収集と通報

浜田港(鳥根水試)、境港(鳥取水試)、但馬5港(兵庫水試)、小木港(石川水試)及び函館港(函館水試)などの主要漁港において、調査員が入港漁船、市場、その他から、日別、氷蔵船・凍結船別に、①入港隻数、

②総漁獲量、③1隻の最高・最低・平均漁獲量、④週間の漁場位置または操業範囲、⑤1航海の実操業日数、⑥漁獲イカの外套長範囲とモード、などについて調査し、毎週水曜日に、前日までの1週間分を関係水試を通じて日水研へ通報してもらった。試験実施期間中、主要漁港から通報されたこれらの情報数は、延隻数にして氷蔵船2,409隻、凍結船227隻であった。

3) その他の漁海況情報の収集と通報

福岡県いか釣漁業組合からは、自県船団の日別の操業隻数、総漁獲量、最高・最低・平均漁獲量について、千葉水試からは自県船団の日別の操業隻数、操業漁場範囲、総漁獲量について、それぞれ情報を提供してもらった。また、新潟県いか釣組合からは、新潟港における日別の入港隻数、総水揚量、1隻最高・最低水揚量について情報提供があつた。

情報の処理

日水研では送信されてきた漁獲試験及び漁海況情報資料を統一的に処理し、週間(水～火曜日)の主漁場や操業範囲、氷蔵船・凍結船ごとの漁獲量、イカ群の密度分布、漁場別のイカの大きさなどを把握し、前週及び例年・前年同期との比較検討を加えたうえで、漁海況情報文を作成した。この情報文を毎週木曜日の午前中にテレックスによってセンターへ送信した。

広報

センターでは、県水試や漁業用海岸局等から送信されてくる調査船、標本漁船等の水温情報資料にもとづいて表面水温図と50m層水温図を直接作図し、それに海況解説を加え、さらに日水研から送信された漁海況情報をも総合して、毎週水曜日にフアクシミリ放送用の速報に編集し、それをテレファクスによって中央漁業無線局へ送信した。中央漁業無線局では、毎週木・金曜日に都合4回、フアクシミリによる放送を行なつて広報した。また、これとは別に作成された無線電信・電話による放送文が、境港・新潟・小樽の各漁業用海岸局へ電話で伝えられ、これらの各局から無線電信・電話による放送も行なわれた。

解決すべき問題点

情報処理作業の間でまず問題になつたのは、凍結船の1航海当たりとか1操業当りの漁獲量についてであつた。

氷蔵船の場合は30~99トンの中型船に限られ、各地の漁船規模にあまり大差がないのに対し、凍結船の方は、50トン以上の中型船から数百トンまで、船腹の大きさに大差があり、漁獲物の積載収容力にも、また1航海の実操業日数にも10~40日と大きな開きがあつた。したがつて、今後の情報収集にあつては、凍結船を船型によつて区分すること、少なくとも中型船と大型船に分けて取扱うことが必要であろう。

また、迅速化という目標を達成するため、担当機関の体制とタイム・スケジュールの間にはかなりの無理が生じたことも問題点のひとつであつた。たとえば、日水研の場合、水曜に各地から受信した情報をこなしたうえで、翌木曜の午前中に情報文としてセンターへ送信するというはかなり厳しいものであつた。今回の試験期間が2カ月に限られていたので、各機関担当者の勤務時間等にとられない努力によつて、どうにか消化されてきてはいるが、より長期にわたる場合には、こうした無理な体制では継続が保証できないであろう。

今回の試験実施には、多数の漁船、漁協、漁業用海岸局、水試、水高、水研などから多大の協力が寄せられ

た。とくに漁況情報の迅速なる広報という点に関する限り、7月中旬に実施された漁場一斉調査と地方公庁船の漁獲試験から得られた資料を最も有効に活用することができた。しかしながら、公庁船のみの情報では、時間や空間をカバーするという点でどうしても限界があるので、漁船情報の活用が望ましいことはいうまでもない。今回得られた漁船情報の大部分は入港後のものであつて、洋上からのホットな情報はごく一部のものに限られていた。洋上における各地船団内部の情報交換は、多くの場合、暗号を用いて秘密裡に、活発に行なわれているのが現状である。漁業に限らず、私的企業の活動に有益な情報とは、本来、独占しているときに価値が高く、周知の情報となればその価値が低落するという面のあることも冷厳な現実である。こうした現実のなかで、内容の充実した真に価値のある情報を迅速に広報するには、どうしたらよいのであろうか。そこには、情報の収集・処理システムの合理化以前の大きな問題が存在していると考えられる。これが、迅速化試験を終つたときの筆者の偽らざる感想であり悩みであつた。

(筆者：日水研資源部技官)

＜研究業務短信＞

- 9.2 水産庁官房総務課三野事務官ほか1名来所。
- 9.3 遠洋水研山中海洋部長来所。
- 9.4 日本水産学会中部支部北陸例会、於日水研。水産庁研究課小川係長来所(～6)。
- 9.5 特別研究候補課題現地事前調査、於石川県下、尾形・伊東・沖山・加藤技官(～12)。水産庁研究課本間課長補佐・牧野係長、漁業情報サービスセンター岡田専務来所、漁海況速報業務打合せ(～6)。
- 9.14 タイ国留学生 VATANACHAI 氏研修旅行、於札幌・余市・函館・塩釜、森岡技官同行(～20)。
- 9.18 みずほ丸、近海放射能調査、於新潟北西沖、小牧、永原技官乗船(～20)。水研・真珠研所長会議、於東京、古川所長出席。日本海サンマ漁業開発調査打合せ会、於村上、岡地技官出席(～19)。
- 9.19 太平洋スルメイカ長期漁海況予報会議、於函館、笠原技官出席(～20)。鳥取水試佐野分場長・石川水試山田技師来所。
- 9.24 カキ性状・環境調査、於両津・佐和田、鈴木・大池技官(～27)。
- 9.26 日本海スルメイカ長期漁海況予報会議、於金沢、岡地・笠原・長沼技官出席(～27)。研究施設視

- 察、於富山水試、大野課長・小金沢技官(～27)。山形水試山洞・樋口技師来所。
- 9.27 水産庁官房総務課田中係長、研究課小川係長来所(～23)。
- 9.28 日本海ブロック漁況海況連絡会議、於金沢、岡地・笠原・長沼技官。
- 9.30 水産庁開発普及課尾崎課長来所。所内研究談話会、①森岡泰啓；佐渡近海における橈脚類 *Par-euchaeta elongata* の分布の季節変化
② 上村忠夫；食物連鎖における転換効率の問題と関連して——GULLAND の文献からの一部紹介——
③ 小牧勇蔵；ニューストーン・ネットの紹介
④ 沖山宗雄；日本海産カレイ亜科魚類の幼期
⑤ 加藤史彦；標識放流法による飯田湾のマダイ1才魚の資源量の推定

＜人事異動＞

日本海区水産研究所 10月1日付

転入 みずほ丸甲板員併任
(水産庁官房総務課予備船員) 渡辺喜代孝